

令和6年度 第1回図書館協議会

- 1 日時 令和6年6月18日（火）10：00～
- 2 場所 中央図書館2階研修室
- 3 出席者（委員） 今村委員、福沢委員、玉置委員、矢澤委員、雄長委員
和田委員、林委員、下川委員、千種委員
（事務局） 瀧本中央図書館長、関口中央図書館長補佐兼情報サービス係長、
宮下地域読書推進係長兼鼎図書館長、木下管理係長、
- 4 中央図書館長挨拶
- 5 玉置会長挨拶
- 6 会議事項
（1）飯田市立図書館サービス計画の振り返り
（2）その他
- 7 連絡・報告事項

6 会議内容 （司会） 玉置会長

(1) 飯田市立図書館サービス計画の振り返り

○会 長 最初に会議事項1、飯田市立図書館サービス計画の振り返りについて、事務局から説明をお願いします。

○事務局 資料「第4次飯田市立図書館サービス計画振り返り」に基づき説明。

第4次飯田市立図書館サービス計画振り返り

1. 3年間（令和3～5年度）の総括

- ・第4次飯田市立図書館サービス計画の上位計画には「いいだ未来デザイン2028」「飯田市教育振興基本計画」がある。第4次飯田市立図書館サービス計画はこの上位計画の中期計画に合わせて策定しており、計画期間は令和3年度から令和6年度までの4年間となっている。この総括は昨年度までの取り組みの総括。
- ・第4次飯田市立図書館サービス計画は、「一人ひとりの読書と学びを支えます。」「読書を通じた交流やつながりを広げます。」「地域の歴史と文化の記録を蓄積し、現在から将来にわたって地域の学びに活かします。」を基本方針とし、取組を実施。
- ・令和3年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、社会教育施設全館が休館していた時期もあり、学校生活も制約を受ける状況であった。図書館としては休館期間を設けずに、市民の方々が家で読書ができ心豊かなひと時を過ごせるように、貸出業務は継続して実施した。

- ・人が集まる集会行事が行えなくなったことから、読書をどのように広めていくかという目的を達成するために、制限がある中で何ができるかということを考えて、新しい事業を実施した。新型コロナウイルス感染症への対応は大変ではあったが、図書館にとって大事なことは何かと振り返り考える機会となり、この時に始めた取り組みが現在でも続いている。
- ・令和3年度には幼児期の読書体験の充実に向けて、4歳児（年中児）への絵本プレゼントを始め、家庭での読書がより広まるように家庭へ絵本を届ける取組を進めた。その結果、令和4年度に実施したはじめまして絵本アンケート、おともだち絵本アンケートでは家庭での読書の広まりを確認でき、利用統計においても、0～5歳の人口に対する利用者数の割合は5年前よりも増加している。
- ・令和4年度には、学校図書館司書の中に、飯田市の学校図書館の担当者を取りまとめる学校図書館担当専門主査という係長職がおかれた。小・中学生に対してこどもたちの一番身近にある学校図書館の充実から読書活動の充実を進めることが必要であるという考えから、この職員を学校図書館側の窓口として、公共図書館としても学校図書館司書と連携を図りながら取組を進めた。
- ・令和5年度には、コロナ禍で制限されていた交流の場づくり、読書会や本を通じて集まった皆さんが話しながら学びを深める機会づくりを積極的に行った。また、これまでの飯田市立図書館の取組評価と次期サービス計画策定のために図書館アンケートを実施した。
- ・第4次サービス計画における取組別指標と目標値をみると、コロナ禍で下がった数値が徐々に回復しつつあるものの、全市民のうち1年間に図書館を利用した人の割合が、第2次サービス計画では2割強、第3次サービス計画では2割を切り、その状況は現在も続いており、市民の中で図書館を利用する人は全体から見ると少ないのが現状である。また、小中学生の読書習慣形成、40代までの年齢層の図書館利用については課題があり、郷土資料を利用する方々も目に見えて減ってきている現状がある。
- ・図書館アンケート結果から、図書館の様々なサービスについて「知らない」と答えられた方が多かったり、「本は読まない」と答えた方が前回のアンケート結果より多くなっていたり、「図書館に行く目的がない」と答える方が増えていたりする現状もある。こうした現状をふまえながら、次期サービス計画の策定を進める。

2. 具体的な取組の評価

I 図書・資料・情報提供を充実させます

□目標値の進捗状況と要因分析

- ・「16歳～29歳の貸出利用者数」は、策定当初は施策Ⅲの「身近に使える図書館の充実を図ります」の指標であったが、3年間の取組を進める中で、施策Ⅰの取組内容と合致しているため施策Ⅰの指標とした。

- ・「貸出利用者数」は、コロナ禍の影響により市民の方へ図書や情報の提供が十分にできず、令和3年度から令和4年度にかけては減少し、令和5年度は回復傾向にある。
- ・「予約数」は、コロナ禍の影響によりインターネット予約が飛躍的に伸び、目標値を上回った。利用者が一度に予約する冊数も増えている。
- ・「レファレンス件数」は、コロナ禍で図書館での滞在時間が制限され、市民の方も十分に調べ物ができず件数が大きく減少したものが、令和5年度に回復傾向を見せている。全国的にもデジタルアーカイブやオープンデータ化が進み、図書館アンケートにおいても調べものはインターネットで行う人が多い結果があり、インターネット上で調べられることが増えてきている影響も考えられる。
- ・16歳～29歳の若い世代の貸出利用者数は、人口の減少割合以上に減少している。若い世代に図書館利用の習慣がある人が少ないと考えられる。

□取組と成果

- ・コロナ禍においても、中央・県・上郷・駅前図書館では感染防止対策を取りながら開館を継続し、市民の読書環境を保障することができた。
- ・各図書館で分担して図書購入を行い、市民の関心の高い分野、個々の仕事や地域の産業に関する図書、郷土資料、大活字本などを提供した。
- ・速やかな情報提供に向けてレファレンス（調査相談）事例を蓄積・活用していくため、国立国会図書館レファレンス協同データベースにレファレンス事例の登録をはじめた。
- ・令和4年度に飯田駅前の「ムトスぶらざ」内に、高校生を利用対象の中心に据えた飯田駅前分室を開館した。その駅前分室に設置した予約本受取ロッカーは、「ムトスぶらざ」が開いている8時30分から22時まで予約本が受け取れるようになり、利用者の利便性が向上した。
- ・令和5年10月にコンピュータシステムを更新し、スマートフォンに利用者番号のバーコードを表示させて貸出や予約ができるようになり、利用者の利便性が向上した。
- ・長野県内の全市町村と県が協働で運営して電子書籍を提供する「デジとしょ信州」が令和4年8月から始まり、飯田市立図書館としても電子書籍が提供できるようになった。

□今後の課題と方向性

- ・図書館アンケートの結果を見ると、予約・リクエストサービス、レファレンスサービスを知らない方や利用したことがない方が一定数いたため、図書館は読みたい本を得られる場所であること、生活や仕事上の様々な課題を解決するために必要な情報を得られる場であること、偶然出会った本から興味・関心が広がる場であることを知ってもらう取り組みが必要である。そのため、多様化する市民のニーズに応じた図書を収集・提供するとともに、情報探索支援やレファレンスに重点を置いて、レファレンス事例の蓄積や情報探索講座などに取り組む。また、図書館の使い方の案内や予約・リクエストサービスの周知に努める。

- ・年齢区分別の人口に対する利用登録者数の割合の推移を見ると、若い世代での減少が続いている。そのため若い世代に対しては、小中学生期に読書の楽しさを体験し読書習慣を形成することに取り組むとともに、来館された方の要望やニーズを大切にすして確実に応えていくことで利用推進を図る。

Ⅱ 子どもの読書活動を推進します

□目標値の進捗状況と要因分析

- ・7か月児のはじめまして絵本プレゼントと4歳児の絵本プレゼントは、乳幼児の家庭に本がある環境を作ること、家庭での読書の充実を図ることを目的として実施。令和3年度から始めた4歳児への絵本プレゼントは「おともだち絵本」と名付け、保育所に出向いて実施している。7か月児相談を受診しない家庭や保育所に通っていないこどもには個別に対応し、受取割合ははじめまして絵本プレゼントは目標値に近い実績、おともだち絵本は全ての対象者に渡すことができた。
- ・中央・鼎・上郷図書館や分館から団体貸出をした絵本を園児が家庭へ持ち帰るという取組を、「おともだち絵本」の取組とともに保育所と連携しながら行っており、「絵本を家庭へ持ち帰っている保育所数」は目標値の26園以上に増加した。
- ・「日常的に読書を行っている子どもの割合」について、全国学力・学習状況調査の結果からは、令和元年度に比べて県平均、飯田市の割合ともに減少しており、読書習慣が形成されていないこどもが増加していると推測される。こどもの生活の中でパソコンやインターネットに触れる時間が増加していることも原因と考えられる。

□取組と成果

- ・はじめまして絵本事業による7か月児への絵本プレゼントや2歳児相談、図書館のおはなし会、定例の講座、他機関と連携して乳幼児学級やつどいの広場などにおいて、親子で絵本を楽しむことの呼びかけ、読みきかせや本の紹介を継続して行った。コロナ禍で7か月児相談が実施されない期間には、図書館からのメッセージを付けて郵送することで絵本プレゼントと家庭読書の呼びかけを継続した。令和4年度に実施した「はじめまして絵本」アンケート結果によると、絵本プレゼントをきっかけに読みきかせをした（90.6%）、図書館を利用するようになった（36.5%）との回答があり、成果がみられる。
- ・4歳児（年中）に絵本をプレゼントする「おともだち絵本」では、年中児だけではなく他の学年にもおはなし会や団体貸出などで絵本を手渡せるとともに、家庭への本の持ち帰りを行う保育所が増え、家庭に絵本がある環境が広がりつつある。
- ・学校図書館担当の先生方と連携して、小学生の読書へのきっかけとなるように学年別おすすめ本のリスト「よむリス」を作成した。令和5年度には上郷図書館の職員1名を学校図書館支援担当と位置づけ中学校図書館訪問を行い、こどもの読書と学校図書館の現状や課題の聞き取りを行った。ま

た、令和5年度から始まった学校図書館システム導入の支援も行い、学校図書館司書との連携が強化されつつある。

- ・中学生対象に部活休止期間に「Join us いいだLib」として、図書館業務体験やビブリオバトルなどの企画を実施。
- ・高校生が本に親しんだり、本を通じた交流や活動を行ったりする場となることを目指して、令和4年5月に飯田駅前図書館を開館した。分類順ではなく、高校生の興味に沿うようなテーマを設定して本を配置したことで、多様な分野の本を手にとってもらうことができた。令和5年度には本を通して交流するイベントを定期的に行い、高校生の図書館に対する興味・関心を広げることができた。

□今後の課題と方向性

- ・こどもが自発的な読書習慣や情報を活用する力を身につけるためには、読書の楽しさや知る喜びを体験することが必要であるため、小中学校の学校図書館などこどもに関わる機関と連携して、発達段階に応じた読書体験の充実に継続して取り組む。
- ・中学生、高校生世代から未読者が増加し、図書館利用も減少するため、その年代以前に読書習慣を身につけ、本に興味をもったり、興味・関心が広がったりするような取組が必要となる。学校図書館と課題を共有しながら、今後の取り組みを協議し小・中学生の読書活動の推進を図る。
- ・駅前図書館を中心に高校図書館と連携しながら、高校生に対して本や図書館に親しみ、交流が広がるような機会づくりに取り組む。
- ・図書館アンケートにおいて「乳幼児連れでは図書館に行きにくい雰囲気がある」との回答が複数みられたため、乳幼児親子が気軽に図書館を利用できるようになるための働きかけを行う。

Ⅲ 身近に使える図書館の充実を図ります

□目標値の進捗状況と要因分析

- ・飯田市内の各地区に16分館1分室を設置して、市内全域で図書館サービスを展開している。「分館での住民一人当たりの貸出冊数」を指標としているが、令和2・3年度はコロナ禍による臨時休館があり、こどもたちの行動も制限されていたため、利用が減少した。令和5年度からはおたのしみ会や地域との連携事業を実施し、こどもの利用も回復しつつある。

□取組と成果

- ・コロナ禍で休館を余儀なくされた時期もあったが、各分館で期間を設けてのスタンプラリーやビンゴなどで本を借りてもらう取組を行った。
- ・下久堅分館では紙すきに関連する資料、龍江分館では今田人形に関連する資料といったように、各分館にその地区の特色を紹介する郷土資料などを集めたコーナーを設置した。

- ・公民館や保健師と連携して、乳幼児学級の際に読みきかせや貸出を行うなど子育て世代への取り組みを推進した。
- ・保育所等を通じて家庭へ絵本を届ける取組の一環として、分館からの団体貸出を実施した。
- ・地区内の施設や関係団体等との連携が進み、本を借りるだけでなく、地域にとっての“居場所”や“交流する場所”という役割も果たしている。

□今後の課題と方向性

- ・分館の存在や本の中央図書館等からの本の取り寄せなどのサービスを知らない方もおり、さらなる周知が必要である。
- ・図書館アンケートに「中央図書館等で借りた本を分館でも返却できるようにしてほしい」という要望があり、課題や手法、分館へのコンピュータシステムの導入についての検討を行う。

Ⅳ 学びあいにより人と人がつながり、読書や学びが広がる場づくりに取り組みます

□目標値の進捗状況と要因分析

- ・「講座・企画等開催数」は、令和4年度に開館した飯田駅前図書館で小規模な企画を多数実施したことで、令和5年度は31件となっている。
- ・「講座・企画等参加者数」は、コロナ禍前の令和元年度の水準には達していないものの、令和5年度には1,159人の方にご参加いただき、回復傾向にある。

□取組と成果

- ・令和5年度から、コロナ禍で制限されていた本を通した学習交流の場を積極的に設けてきた。読書会交流会実行委員会主催で実施した読書会では参加者同士で語り合うことで交流が深まり、また、参加者同士が本の紹介をし合い交流する「ビリオバトル」も初めて実施した。
- ・文学講座を開催し、市民の方が古典の面白さに触れる機会が提供できた。

□今後の課題と方向性

- ・飯田下伊那地域では読書会の活動が盛んであったが、高齢化により地域の読書会の数が減っており、主体的に読書交流活動を運営する人が減少している。一方で、本について語る場を求める方たちは一定数いるため、本について語り合う機会の提供を行う。地域の読書会の実態について、定期的に把握して支援を行う。
- ・令和7年度に中央図書館が公共図書館として開館して110周年を迎えるため、記念事業を市民の方と一緒に検討することで図書館とつながりのある方を増やしながら、読書や学習交流の輪を広げる。

【郷土資料を活用した学習交流の取組】

Ⅳ 学びあいにより人と人がつながり、読書や学びが広がる場づくりに取り組みます

V 地域の歴史と文化の記録を蓄積し、提供します

□取組と成果

- ・ 鼎図書館と鼎公民館が共催で、中学生と一般の方が一緒に郷土資料で地域を調べる「鼎ナゾとき探偵団」を令和3年度から毎年実施し、中学生と一般の方が世代を越えて学習・交流したことで、学びが深まり地域の魅力を見つめなおすきっかけになりました。
- ・ 伊那谷地名研究会と共催の伊那谷地名講座では、令和5年度に参加者自身が郷土資料を使って地名について調べる「地名研究ワークショップ」を実施した。参加者の中には初めて地名辞典を開く方もおり、郷土資料に触れるよい機会となった。
- ・ 令和5年度に田中芳男をモデルにした小説『博覧男爵』を読み、田中芳男について語る読書会を行った。

□今後の課題と方向性

- ・ 伊那谷の自然と文化に親しみ、地域資源を活用して魅力を発信してきた方々が高齢化してきており、地域の魅力を市民や次世代に伝えていくためには、地域を研究する人材の育成が必要である。
- ・ 地域を学ぶ座学の講演会に比べ、ワークショップ形式の参加者は少なくなる。郷土資料を使って自分で調べたり発信したりする機会を設けていく。また、参加者同士が話し合ったり、地域の研究者と参加者が学びあったりする学習交流の場を作る必要がある。

V 地域の歴史と文化の記録を蓄積し、提供します

□目標値の進捗状況と要因分析

- ・ コロナ禍により郷土関連の講座を中止したことで、郷土資料を紹介する機会が減り、「郷土資料の情報発信数」も減った。令和5年度のコンピュータシステム更新に合わせて、ホームページ上での郷土資料情報の発信を増やしたため、目標数の150を超える168となっている。
- ・ 令和4年度までは感染症対策のため、利用者自身が長時間滞在しての調べものができず、また、郷土について調べる方が高齢化、固定化している傾向もあり、郷土資料の貸出冊数は減少している。

□取組と成果

- ・ 地域や社会で話題となったりんご並木70周年、田中芳男などのテーマに合わせた郷土資料を紹介したほか、教育委員会の関連部署と連携し、郷土資料を展示・紹介、図書リストの配布を行った。
- ・ 飯田下伊那発行新聞をデジタル化し、新聞閲覧システムに搭載する取組を継続して行ってきたことで、郷土新聞の記事を簡便に調べることができるようになり、利便性の向上とともに、利用者も増加している。
- ・ 未公開の貴重資料や郷土新聞の目録をホームページに公開し、検索できるようにしたことで、市民の方や研究者が郷土資料を探しやすくなった。また、調べる方が多い「満蒙開拓」や「小笠原氏」

などのテーマについて地域資源図書リストを作成し、書棚に見出しとして表示したことで、地域資源を発信するとともに、本が探しやすくなった。

□今後の課題と方向性

- ・郷土資料を用いて自ら学ぶ人が減少している中で、地域の学びを深めるための郷土資料の利用の推進には、学習交流の場づくりが必要である
- ・教育委員会関係部署と連携した郷土資料の展示・紹介を引き続き行うとともに、分館や各地区公民館へ地域資源図書リストを配布し、郷土資料の活用を呼びかけていく。
- ・新たに発行された郷土資料の網羅的収集をめざして、チラシを配布して提供の呼びかけを行うとともに、郷土資料の情報発信を行う。

VI 安全で安心して使える施設を整えます

□取組と成果

- ・飯田市教育委員会施設等総合管理計画に基づき、改修工事を実施した。
 - 【令和3年度】中央図書館1階照明器具LED化工事
 - 【令和4年度】中央図書館エレベータ改修工事、東側外壁改修工事、中2階照明器具LED化工事、空調設備更新工事
 - 【令和5年度】中央図書館空調設備更新工事、書架照明LED化工事、上郷図書館トイレ洋式化工事
- ・消防設備や電気器具等の各種設備の定期的な点検や必要な施設設備の修繕などを行い、利用者が安全で安心して利用できる施設として運営を維持し、来館者にとって施設使用の快適性が向上した。

□今後の課題と方向性

- ・利用者の安全性や快適性を確保するため、経年劣化により故障や破損が増加している施設設備について、飯田市教育委員会施設等総合管理計画に基づき、定期的な点検、予防保全型の改修や環境に配慮した施設整備を計画的に実施する。

□次期サービス計画策定に向けたスケジュール案

～10月末	素案作成
～11月末頃	図書館協議会へ案を提出
12月	飯田市教育委員会、社会教育委員会、議会の社会文教委員会協議会等に案を提出
12月下旬から	パブリックコメント実施
2月まで	図書館協議会へ諮問
3月	教育委員会定例会で決定
	議会全員協議会で報告

[質疑・意見聴取]

- 会 長 今の事務局の説明を受けて、ご質問ご意見等、お寄せいただきたいと思います。いかがでしょうか。
- 委員A こどもが騒いでしまうため図書館に行きにくいという声があり、「こどもタイム」を作ること考えているとあったが、具体化しているのか。
- 事務局 現在はどういうものにしていくか、検討している段階である。
- 委員A 「こどもタイム」は1日の間の短時間、設定されるのか。それとも、日中の時間が全て「こどもタイム」となるのか。
- 事務局 図書館にこどもを連れてきて声を出したりすると、親御さんが気を使って「静かに」と言うことがあるが、「こどもが普通の声で話すことは大丈夫ですよ。」ということをアピールするものもある。こどもが走り回ったり、大きな声を出したりすることには、図書館としても注意させていただくが、気軽に図書館に来てもらう、来館することのハードルを下げる意味合いで「こどもタイム」を設定するものである。中央図書館でいえば毎週土曜日の午前中におはなし会を実施しているため、例えば土曜日午前中を「こどもタイム」として、この時間はこどもが大勢いて気軽に話しても大丈夫であり、来館されている大人の方もこどもたちを大きな気持ちで見守っていただきたいということをお知らせする目的である。
- 委員A 平日の昼間に母親とこどもが出かける場所として図書館があるということをアピールする、そのために「こどもタイム」ができれば、こどもにとってもお母さんにとってもいいと思うが、いかがか。
- 委員B 子供が入園前は、こどもを連れてよく図書館を利用していた。図書館で来館していた母親同士が仲良くなり、自分では手に取らない本を他のお母さんから紹介してもらうこともあった。昼間にこどもと2人で家にいるよりは、図書館などの交流ができる場があってありがたかった。
- 委員A 「こどもタイム」は平日に設定したほうがいいのではないか。
- 委員C こどもさんが小さいお母さんたちからは、図書館に行った際は「周囲を気にする」という声を聞く。だが、中央図書館や上郷図書館の児童書コーナーを利用している親子連れの皆さんは、気を使っはいるものの楽しそうにお話をしながら利用されている。じゅうたんのコーナーは小さいこどもさんが来る場所なので、多少こどもの声がしても大きな気持ちで見えていただきたいと働きかけることが大事だと思う。
- 「こどもタイム」という時間を設けるのではなく、図書館は小さいこどもも利用する場所であるため、児童書コーナーは「小さいお子さんが利用する場所」として、小さいこどもさんの泣き声が聞こえたりお喋りしたりしても、大きな心で受けとめてくれませんかとおアピールすることが大事ではないか。
- 会 長 このように、時間ではなく場所で区切るということも検討していただきたい。そして、図書館は小さいこどもも利用する場所であることの認識が広まるとよい。

○事務局 「こどもタイム」は特別なものではないと考えている。「こどもが泣いても大きな心で」というのは日常的に利用者の方にお願ひしながら、「図書館では静かにしないといけない」と思って来館をためらっているお母さん方の来館のきっかけになるような時間を設定したいと考えてのものである。場所というご意見もいただいたので、それも含めて今後検討していきたい。「こどもタイム」の設置は、「その日だけは図書館に来てもいい」ということではなく、親子連れの図書館利用を日常のものにしたいという思いがある。こどもが普通の声で話してもいい、泣いても大丈夫という雰囲気をつくる日常的なものにしていきたいと考えている。そのためのきっかけを作りたいというものである。

○委員D 文章講座同窓会の会員も減少してきている。どうしたらいいかと考えたときに、図書館で行っている講座に来る人を増やそうということで、飯田高校、飯田風越高校、飯田女子高校、下伊那農業高校、飯田 OIDE 長姫高校、飯田短期大学に働きかけ、部活に文芸部があるかを確認した。文芸部があったのは飯田女子高校のみであったが、文芸部の皆さんに興味を持ってもらおうと声がけしたところ、講演会で発表をしていただけた。こうしたことから、図書館にも興味を持ってもらえたらと考えている。

上郷小学校の副教材づくりでは当初専門家 5 人で作る案であったが、一般市民が作る方が小学生にも読みやすいのではないかという話を公民館長からもらい、住民 30 人ほどで 2 年かけて副教材を作った。その際は関わっている住民が頻繁に図書館を利用し、様々なことを調べさせてもらった。資料もなく、そもそも分からないことをどこに聞けばいいのかもわからない場合もあり、そういう時に図書館で聞けば「どこにどういった資料がある」ということがわかるようになるとよいと感じた。図書館だけでは情報が不足している部分もあるかと思うので、公民館など他の機関とも連携しながら情報収集を行っていただきたい。

また、地域に関する記事を新聞へ寄稿し、地域の情報を発信できる人が少なくなっている状況もある。

○委員C 地区のまちづくり委員会で、何かを「知りたい」となったときの拠り所は図書館である。歴史研究所でも新しい古文書を見つけることは難しいため、図書館に所蔵している古文書を読み解いて研究しているという話も聞いた。今年度は旧小笠原家書院築 400 周年であり、このことについて調べる際には図書館に協力していただいた。このように各地区でも気軽に図書館や分館に声をかけて連携して、親しんでいってほしい。三穂でも公民館事業の際には分館と連携して、係員の方に読みきかせや紙芝居などをしてもらっており、ありがたく思っている。

○委員F こどもに向けた取組では保育園での読み聞かせなどで効果が出てきているとのことで、うれしく思っている。

大人については、自分の興味がある事には参加する方が多いので、読書の講演会や講座など行くと、関心のある方たちが多く来られると思う。多くの方が関心を持っている内容の企画をしていただきたい。

- 委員A 前回の図書館協議会の際に、小学校・中学校の図書館は放課後、児童・生徒に開放されていないと聞いた。一方、アンケートの回答には「学校の先生に紹介された本がきっかけで読書が好きになった」という答えがあり、学校の先生が「この本が面白いから、読んでみて」と紹介するのは影響力があるのではないかと思う。先生方も忙しいと思うが、学校でどのように取り組んでいるか教えていただきたい。
- 委員G 図書館の業務を行う委員会のこどもたちは、どうやったら図書館に来てもらえるかということ、こどもたちなりに考えている。図書館に来てくれるこどもたちに向けては、来館時に楽しめる企画を読書旬間などに用意している。しかし、普段図書館に来ないこどもたちにどうやって図書館に来てもらうかについては、例えばポイントカード的なものや、ビンゴカードで全部のジャンルの本を読んだらしおりがもらえるといったことをこどもたち自身で考えて行っている。こどもたちの間でも、図書館に来てくれるこども対象の内容、あまり来てくれないこども対象の内容というように、それぞれの方向で取組内容を考えている。
- また、こどもたちから先生に本を紹介してほしいという依頼があり、おすすめ本の紹介文と表紙のコピーと一緒に展示しておく、こどもたちが興味を持って借りていくということが見られる。
- 委員H 現在読書週間中であり、中学校でも生徒からの依頼で先生のおすすめ本を紹介・展示しているが、その本を手にする生徒は多い。
- 委員A こどもたちはタブレットやスマホを見る時間が多くなり、本を読まなくなっていると言われているが、こどものときに本が面白いと気づくと、それは一生の宝物である。小学校や中学校の先生の一言が与える影響は大きいと思う。
- 委員H 電子書籍だと様々な種類の本が無料で読めるため、電子書籍を利用している生徒もいる。個人的には紙の本のほうが読みやすいが、生徒たちは電子書籍という形態でも文学には触れている。
- 委員A 電子書籍で読んでいるのは読書をしたことにはならないのか。
- 事務局 図書館概要の利用者数には、電子書籍を読んでいる方は入ってはいない。
- 委員A 実はこどもたちは様々な媒体で本を読んでおり、読書をしている数も増えているのかもしれない。
- 事務局 1冊の本を読み切って「面白かった」という経験をしたことのあるこどもが電子書籍を読んで、様々な本が読めてよかったということであれば良い。その経験をしたことないこどもが電子書籍を読むようになると、深くじっくり読むことができるのかと心配もある。
- 現在「デジとしょ信州」でもこども向けの作品が読めるが、同じような内容のものが多い。もう一步を進んだ難易度の高い本を読んで、1冊の本を「読んだ」という経験ができると、こどもにとってもいいと考える。電子書籍の利用方法については難しい部分もあるため、学校の先生方とお話させていただきたいと考えている。
- 委員A 「紙の本もおもしろいよ」と伝えていくことも必要だと思う。

○委員D 学校の先生方と意見交換をする機会があり、タブレットで勉強することで学びが身につくのかという話が出た。自分たちの年代だからこのように心配するのであって、若い人たちはデジタルが当たり前であるため、タブレットでも身についていくだろうという話になった。

○委員G こどもたちはタブレットを上手に使っているが、紙の本には紙の本ならではの良さがある。例えば『はらぺこあおむし』の穴は電子書籍では伝わらないため、低学年のこどもたちには質感も含めて紙の本の良さを知ってもらいたい。

○事務局 電子書籍が悪い、紙の本がいいということではなく、それぞれに良い面があるため、両方の良さを知って上手に活用してもらえればと思うが、まずは紙の本を読む面白さをこどもたちに知ってもらいたい。

○委員C 読みきかせボランティアの活動を行っている中で、1・2年生には絵本の読み聞かせができるが、3・4年生になると物語を読むようになるため、その年代に読みきかせボランティアがどう関わっていったらいいのかという課題がある。私は月に1、2回、小学校の朝読書の時間に読みきかせに行っているが、その15分で6年生に対してどんな本を読もうかと悩む。私自身は、ただ絵本で面白いお話だけではなく、やはり物語を読みたくなるような話や絵本をこどもたちに持っていきたいと思っている。個人的には「よむリス」を活用する形で、絵本を読んだから、「よむリス」に関連した本を『『よむリス』の中にこういう本が紹介されているよ』と紹介して、こどもたちに物語の本を面白いと思って読んでもらえるようになったらいいと考えている。そのためには、幼児期にどれだけいい絵本を大人から読んでもらっているかということも大事になると思う。

○事務局 図書館ボランティアの方や学校図書館の方たちなど、こどもの読書に関わる方たちと話すなかで、今課題なのは、文字だけの本を自分で読むためにはどうしたらいいのか、ということである。これまで絵本を読みきかせることには一生懸命取り組み、現在充実してきている。以前に学校図書館にアンケートをとった際も、低学年の児童は週に1回は読み聞かせをしてもらっており、本を読んでもらって楽しむ機会というのはある程度確保できているとのことであった。最初は絵の多い優しい本を読んでも、読みごたえのある本や説明文を、興味を持って読むようになるにはどうしたらいいのかという課題がある。これからは、読んでもらうことから自分で読むことへという取組を、学校図書館と連携して行っていかなければならないと考えている。

現在飯田市立図書館で「コロポン」といって、園児向け、小学校1・2年生向け、3・4年生向け、5・6年生向けのそれぞれのボタンを押すと、図書館のおすすめ本を書いた紙がガチャガチャのように出てきて、その紙に書いてある本を借りて読もうというものだが、これも読みごたえのある本をどうやって手に取って読んでもらうかと考える中での工夫の一つである。

こどもたちに自ら興味を持って本を読んでもらうためにはどうしたらいいか。本ならではの良さを感じてもらうにはどうしたらいいか。手軽で読みやすい本を読むのもいいが、それで読書の本当の魅力が伝わるのか。漫画を読んだり、動画を見たりすることと何が違

うのか。電子書籍で読んでもいいが、読書ならではの魅力を体験してもらうにはどうしたらいいかと考えているため、良いアイデアがあればご意見をいただきたい。

- 委員A 小学校の図書委員は本の好きな子どもたちが多いため、本をあまり読まない子どもたちを引き込んでいくということができればよい。
- 委員G 図書委員の子どもたちも、読書旬間を利用して利用者数を増やしたようである。貸出冊数という1つの指標があり、どうしたらいいのかと考えて、読書旬間の期間だけ貸出冊数を3冊にした。そうすると常に利用している子どもたちは喜んで参加するが、来ない子どもたちは来ないままである。その実態をどうにかしたいと、図書委員の子どもたちは取組を考えている。
- 委員A 図書委員会の子どもたちからもぜひアイデアをいただきたい。
- 事務局 学校では友達同士がタブレットで本の紹介をしあう取組をしており、そういうことがきっかけになるという話は聞いている。
- 委員D こども自身が自分で考えて、何かをやっていくことが大事になる。自分で考えて必要なものが出てくると、自分で調べたり作ったりするようになるため、子どもたちにもそういう機会を増やしていくとよい。私も、子どもたちに座光寺の恒川遺跡を紹介する双六を作成してもらったらどうかと提案をした。子どもたちが自分で双六を作るとなると、恒川遺跡の内容を知る必要があり、自分たちで調べて工夫して作り上げていった。
- 委員I 各地区の公民館で夏休みなどに寺子屋を実施しており、その際に分館を開放してもらっている。分館の係員の方は地区に住んでいる方たちのため、子どもたちをよく知っており、「いつもこのシリーズものを借りていたが、今日はない。」というこどもがいた際に、「そのシリーズは今貸出中だけど、この本も面白いよ。」と係員の方が本を紹介して、こどもがとても嬉しそうに本を借りていく場面があった。子どもたちのことをわかっていて勧めることができたり、子どもたち同士で「何を読んでいるの?」「これ、おもしろかったよ。」というように本を紹介したりできるとよい。私自身も小学校時代はほとんど本を読まなかったが、中学校で友達に本を紹介されて好きになったため、子どもたち同士で本を通した関わりが増えると良い。
- 委員A 子どもにとって本が身近になるきっかけ作りができるとよい。

(2) その他

- 会 長 それでは、その他について説明をお願いします。

◇事務局 「図書館カフェ」の報告

「とぶ飛ぶとぶ 〜クジラをとばそう〜」チラシ、「よむとす*こども読書 読書っていいな Project」チラシ、「もし、司書になって本を並べるとしたら…?〜自分の本棚を作ろう〜」チラシ、「知って得する! 図書館を使った情報の探し方講座」チラシを説明

・「飯田市立中央図書館開館 110 周年盛り上げ隊 図書館カフェ」の報告

4月から6月まで3回実施。参加者は約20人で、20代の方から70代の方が参加。110周年記念事業を行う目的として、図書館の110年の歩みを振り返りこれからの図書館を考えるきっかけとする、読書を広げ図書館利用者を増やす、図書館とつながりのある人を増やし地域の皆さんと協働で図書館をつくるという3点を確認。

事業案として、大人が絵本を紹介して本について語る会、こんな図書館があればいいという図書館の将来像の意見交換をする会、自分の本を持ち寄っての交換会、本に出てくる料理を作って食べながら本の紹介をする会といった参加者同士が交流できる内容のものが出されている。

- ・とぶ飛ぶとぶ ～クジラをとばそう～（6月23日・かざこし子どもの森公園おいで館）

毎年実施している飯田市立図書館と南信州飯田おもしろ科学工房とのコラボ企画。図書館から職員がかざこし子どもの森公園おいで館へ出向き、空気の実験に関連する本の読みきかせや紹介を行い、その場で貸出も行うこども対象のイベント。

- ・よむとす＊こども読書 読書っていいなProject（7月13日・上郷図書館）

こどもの周りにいる大人の方たちがこどもの読書についての課題を共有し合い、連携を取りながら、こどもに本の世界を楽しんでもらうために大人ができることは何かを考えるワークショップ。

- ・もし、司書になって本を並べるとしたら…？～自分の本棚を作ろう～（7月17日・飯田駅前分室）

図書館の本には分類ごとに番号が付けられており、自分の興味がある分類で紹介したい本を飯田駅前分室の本棚の一角に並べて自分だけの本棚を作り、POPなどで本を紹介する企画。

- ・知って得する！図書館を使った情報の探し方講座（7月28日・中央図書館）

中央図書館では7月から80冊以上の辞事典を一括検索できる「Japan Knowledge（ジャパンナレッジ）」というデータベースを導入する。ジャパンナレッジは情報を検索する際に役に立つため、ジャパンナレッジの利用方法を紹介しながら、図書館の活用方法を案内する講座。

○会 長 長時間にわたり、ご議論いただきありがとうございました。それでは、これで協議を閉じます。いただきましたご意見を参考にサービス計画策定と一緒に取り組むとともに、今年度の事業に協力してまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。